

レガリア「大刀契」について

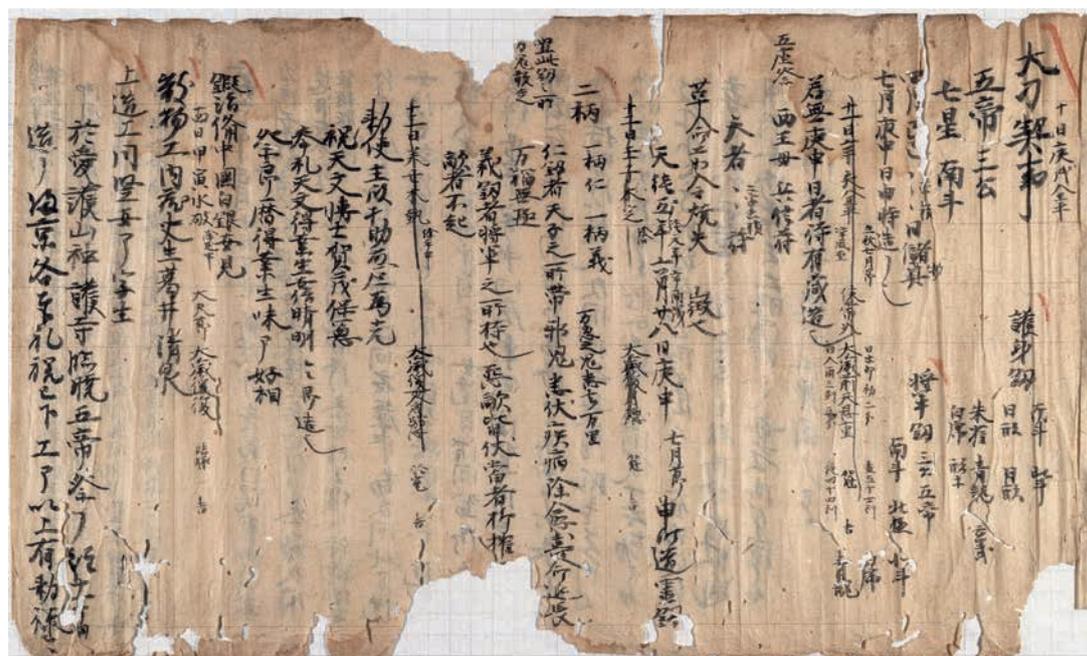
三好順子

「大刀契」とは、神器に準ずる皇位のレガリア（宝器）である。鎌倉時代の事典『塵袋』によると、大刀には2本の霊剣が含まれ、百済伝来の伝承をもち、契は魚符であり、銘に「発兵符某」（某は名前）などがあると記されている。大刀契は唐櫃に収められ、神器とともに内裏の温明殿に安置された。皇位継承時に大刀契が授受されたことが確認できるのは、『小右記』長和5年正月丁卯条が引く淳和天皇の譲位記事（天長10年）が最初である。

内裏火災で焼損の大刀契鑄造記事として、『中右記』（嘉保元年11月2日条裏書）に、蔵人藤原信経私記を引用し、安倍晴明の談として「去天徳内裏焼亡之日、皆悉焼損、晴明為_レ天文得業生_レ之時、奉_レ宣旨_レ進_レ勘文_レ所_レ令_レ作也、…」と、詳細な記事が記されている。山下克明氏は若杉家文書の陰陽道関係史料「大刀契事」【図1】が、応和元年（961）の晴明らの霊剣鑄造に関わる未見史料であると紹介した上で、『中右記』裏書記事との比較検討しながら、次のように述べている（註1）。

①百済国より献ぜられたとの伝を持つ護身剣・將軍剣（破敵剣）の2霊剣は、天徳の焼損後に五帝祭の祝を勤めた賀茂保憲を責任者として鑄造され、その後長徳3年までの間に再度焼損し、晴明は再び鑄造を主張した。②晴明が自らの功を天徳度に遡らせ、応和元年の鑄造に関する日時や五帝祭々官・鑄造工人の歴名を記した「雑事文書」（「大刀契事」）をその証拠とし、累代の重書として子孫に相伝した。③日月や北斗・四神等の図様を持つ護身剣・將軍剣の思想的源流は中国にあり、北斗七星には強力な軍事的意味がある。日月などの図様にも破敵の霊力が認められ、剣に星文を刻むことにより、兵刃や災害を免れる呪刀・護符としての意味をもつ。

図1には、護身剣（南斗・北斗・日形・月形・朱雀・青龍・玄武・白虎形等）・將軍剣（三公五帝南斗…）と形状なども記され、これらは『中右記』の焼損記事（一柄（護身剣）；左方ニ符形纔見、打界也、左鋒ニ雲形纔殘…、一柄（將軍剣）；峯ニ有銘、文云…北斗・左青龍・右白虎・後玄…）や『塵袋』の記事と類似する。



【図1】若杉家文書「大刀契事」（『反問作法并事例』）（京都府立京都学・歴史館、京の記憶アーカイブ）

星雲・竜や日月・四神などを刻んだ古代刀剣には、四天王寺所蔵の「七星剣」「丙子椒林剣」【図2】、法隆寺所蔵の「七星剣」があり、いずれも百済伝来の所伝を有し、『中右記』等に記された二柄の霊剣との類似が指摘されてきた。

しかし、霊剣の中の將軍剣について、將軍や遣唐使が天子から委ねられた証の節刀（將軍剣）に百済の権威を借りる必要がなく、百済からの献上伝承は有り得ないとし、火災で破損のたびに陰陽師が関与し、百済伝來說を含め、陰陽師による脚色や改変を想定すべきとの説もある^(註2)。大刀契は平安中頃から焼失・改鑄に陰陽師が関わる所となり、唐櫃の中は秘蔵として、南北朝頃まで存在したという。

天皇の行幸に随伴した大刀契は、皇位継承のレガリアとして起源に諸説あり、①持統天皇即位時（百済王のレガリア大刀契を天智天皇に献上）、②平城天皇即位時（桓武朝に百済王氏より献上）、③嵯峨天皇讓位時（儀礼の唐風化、『儀式』讓国儀の成立）などが代表とされる。

ところで、6世紀後半の円墳である藤ノ木古墳の石棺内から発見（1988年）された大刀には、金銅製の双魚佩をともなう。被葬者である貴人の装束として副えられた大刀と魚佩は、帰属する身分の象徴として、埋葬儀礼用に特別に誂えたものという^(註3)。伊勢神宮の神宝として20年毎の遷宮時に献納された玉纏太刀【図3】にも魚佩が付属する。古墳に副葬され、神社に献納された大刀と魚佩は貴人の身分を表す装束であり、同様の大刀と魚佩は皇室にも伝えられて

いたであろう。皇室所伝の大刀と魚佩が何らかの契機で皇位継承の際のレガリアに転化したと考えられる。

隨身符（符契）の起源は前漢時代といわれ、古代日本では関契を三関国（鈴鹿・愛媛・不破の関（所）があった国）に与えている。『小右記』に、讓位式の伝国璽が大刀契のことと記されている。霊剣である護身剣（天子所持）・將軍剣（節刀）と関契（魚符）等をさし、天皇権力を構成するものである。皇室には、レガリアとして伝世した劍璽（鏡剣）が存在する。その上に、大刀契が加えられたのは、第二の宝器として、天皇の権力を象徴する、新たなレガリアの必要性が生じたからと考えられる。皇位の正統性を象徴するレガリアとして、霊力・呪力を持つ大刀と、天皇の権力下にある契（関契）が加えられた。剣に星文を刻むことにより、全宇宙の霊力を象徴し、皇位の神聖性を高める要素があった。従来の宝器である劍璽を否定せず、中国に源流のある北斗・四神等の図様をもつ護身剣・將軍剣と関契等で構成された大刀契をレガリアとして付け加えたのである。

註

- (1)山下克明「陰陽道と護身剣・破敵剣」（『平安時代の宗教文化と陰陽道』岩田書院、1996年）
- (2)鈴木拓也「將軍・遣唐使と節刀」（『続日本紀と古代社会』塙書房、2014年）
- (3)『藤ノ木古墳の全貌』（編者 榎原考古学研究所、学生社、1993年）

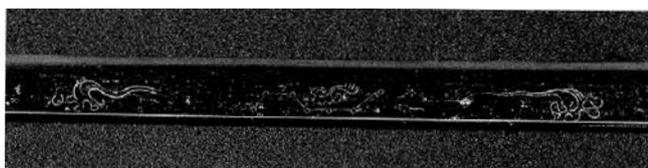
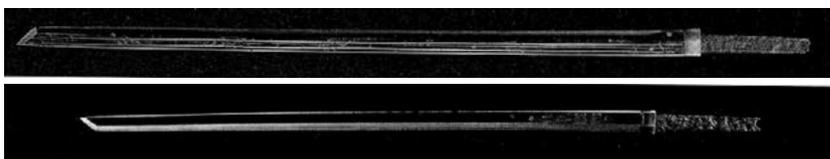
関西大学文学研究科博士課程後期課程

【図2】

上「七星剣」・下「丙子椒林剣」

『聖徳太子信仰の美術』
（四天王寺開創1400年記念出版）
（監修、大阪市立美術館）

部分；左「七星剣」・右「丙子椒林剣」



【図3】「太刀」『神宮遷宮記』（第7巻 図録篇）

*175.85*J2*7

（寛喜2年（1230）正遷宮神宝絵巻物）

